狂言台本における助詞バシ

小林正行

キーワード：バシ、狂言台本、強調、例示

要 旨

本稿は、「強調」や「例示」の意を表すとされる助詞バシについて、狂言台本における使用実態を明らかにし、その用法の変遷を考察するものである。この調査で以下的事実を明らかにした。

・上接語、名詞を直接上接するものが大半を占める。そのうち、目的格相当は全期を通じて用いられ、主題格相当は近世中期以降の台本で新たに多用される。デ・ニテを上接するものは近世中期以降多用される。

・共起する句末表現は、疑問表現が大半を占める。禁止表現は説など定型的な用例に限られ、新しいバシはほとんどすべて「ゴザルカノオリナルカ」という丁寧な疑問表現と共起する。

これらの事実から、用法の変遷についての考察を行い、以下の結論を得た。

・本来上接語を際立たせる「強調」の働きを持っていたバシは、その代表的な用例の性質から、「例えばこのようなもの」と上接語の同類の集合を想定させる「例示」の働きとして解釈され、さらに、新たに上接語の同類の集合を仮想的に表して、「品位」を持って疑問を表す用法が近世中期以降の台本に見られるようになる。

1 はじめに

バシは、中世前期から会話文・心内文に用例が現れるとされ、ある一事を際立たせて示す「強調」や、事物の同類項の存在を暗示する「例示」を表す助詞として扱われている。語源説には、ババの意のバに副助詞シが付いたとする説、係助詞ハとシが結合し語頭が濁音化したとする説、ハに副助詞シモが付きモが脱落したとする説などがあるが、いまだ定説は認められない。

中世のバシについての研究としては、山田孝雄（1914）をはじめとして、小林芳規（1988）、坂詰利治（1993）などが挙げられる。これらの研究によれば、中世前期は、特に目的格の語に接し、仮定、推量、意志、疑問、禁止などの表現と共起するとされる。中世後期では目的格の体言のほかにも様々な助詞や用言の連用形に接し、疑問、禁止の表現に偏る傾向がある。また、バシの働きについて考察したものには山崎幸二（1998）
があり、係り結び体制の崩壊過程においてナ～ソによる禁止や係助词カによる疑問にかわって、禁止や疑念の焦点となる語を明示する働きをするとしている。

近世のバシについては、湯澤幸吉郎（1936）では、近松の歌舞伎・浄瑠璃を中心にバシの用例が挙げられている。安田章（1977）では、ある表現効果をもたらすものとして用いられ、使用階層が武家社会の人々に限られるなど、一般の口語の世界ではほとんど用いられなくなったとしている。特に近世前期のバシを対象とした論考として矢毛達之（2002）が挙げられる。矢毛（2002）では、ロドリゲス『日本大文典』の「或動詞の前に置かれ、時には疑問語を伴い時には伴わない。又ある場合には多分という意を表し、他の場合には単に品位を加えるだけである」という記述を引き、近松作品以前にも、仮名草子類、戯本類、『狂言記』に、疑問や禁止の文中で敬語表現と共起する用法が多く現れ、バシが古めかしい語として「品位」を伴う表現として用いられ始めたことを指摘している。しかし、その理由については、バシが「古めかしい語」として捉えられたから、という一点にとどまる。

本稿では、安田（1977）の、「一般の口語の世界ではほとんど用いられなくなった」バシが、「ある表現効果をもたらす」という記述や、近世前期においてバシが機能を変化させるという矢毛（2002）の指摘を受け、狂言でのバシの使用状況について実際の用例数を調査し、考察する。

狂言の言葉は、流動的だった台詞が固定化していく中世末期から近世初頭の口語を反映している面、その台本が筆写された近世の各時期の口語を取り入れ変化していく面、演劇の言語として継承される際に固定化・類型化していく面など、様々な性格を持つ。中世語としての性格と、舞台言語として「表現効果」を求める性格上、狂言台本にはバシが多用されることが予想される。狂言台本でのバシの用法の変遷を捉えることにより、中世から近世におけるバシの変遷の一面を明らかにすることができそうだ。

具体的には、バシの上接語と、共起する句末の表現に着目し、どの文献でどの表現が現われるのかを明らかにし、その表現意味の変化を考察する。

調査に利用した台本本文は稿末に示す。挙例に際しては、漢字は通行の字体に改め、私に下線を施した。

2. バシの使用状況

まず、各台本におけるバシの使用数を示す。表1から、近世前期の古い台本よりも近世中期以降の新しい台本で多く用いられていることが見て取れる。特に『虎寛本』で非常に多くの用例が得られる。ここから、古体を継承した用例だけでなく、近世中期以降新たに加えられた用例が存在することが予想される。
2.1 バシの現れる文型
各台本でバシがどのような句中に現れるのか明らかにしたい。次頁の表2は各上接語ごとに、どのような句末表現と共起するのかを各台本ごとに示したものである。
名詞を直接上接する例が各台本に見られ、全用例の7割近くを占める。そのうち目的格に相当するものが各台本に見られ、全上接語中最も多い。中でも、疑問表現と共起する例が計54例と大きな偏りが見られる。禁止表現と共起するものは数が限られ、仮定表現、意志表現、推量表現と共起するものもごく少数現れる。名詞を直接上接して主格に相当するものは近代中期以降の台本から新たに現れ、特に『虎寛本』に非常に多くの

表1 バシの使用数

<table>
<thead>
<tr>
<th>天理</th>
<th>虎明</th>
<th>古本</th>
<th>記</th>
<th>綱</th>
<th>忠政</th>
<th>保教</th>
<th>名女川</th>
<th>虎寛</th>
<th>賢通</th>
<th>三百</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>6</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>11</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>27</td>
<td>10</td>
<td>55</td>
<td>21</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>和泉</td>
<td>大蔵</td>
<td>和泉</td>
<td>他</td>
<td>他</td>
<td>鳴・仁</td>
<td>鳴・伝</td>
<td>鳴・伝</td>
<td>大蔵</td>
<td>鳴・仁</td>
<td>和泉</td>
</tr>
<tr>
<td>1640頃</td>
<td>1642</td>
<td>1653〜93</td>
<td>1660</td>
<td>1700</td>
<td>1678</td>
<td>1724</td>
<td>1761</td>
<td>1792</td>
<td>1855</td>
<td>1824〜85</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表2 上接語と共起する句末表現

<table>
<thead>
<tr>
<th>目的格</th>
<th>名詞</th>
<th>直接</th>
<th>主格</th>
<th>天</th>
<th>明</th>
<th>古</th>
<th>記</th>
<th>綱</th>
<th>忠政</th>
<th>保教</th>
<th>名</th>
<th>寛</th>
<th>賢</th>
<th>三</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>目的格</td>
<td>疑問</td>
<td>1</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
<td>14</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>54</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>禁止</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>仮定</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>意志</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>推量</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>疑問</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>37</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>47</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>推量</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>仮定</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ワ</td>
<td>疑問</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>11</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ト</td>
<td>禁止</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ニ</td>
<td>禁止</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>デ</td>
<td>疑問</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
<td>33</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ニテ</td>
<td>疑問</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>6</td>
<td>10</td>
<td>5</td>
<td>11</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>27</td>
<td>10</td>
<td>55</td>
<td>21</td>
<td>20</td>
<td>171</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

※空欄は用例無し
用例が見られる。こちらも疑問表現と共起するものに大きく偏り、禁止表現と共起するものは見られない。その他の上接語を見ると、格助詞ヲ11例、格助詞ト6例、格助詞ニ1例と、助詞を介する例は少ない。また、助動詞ダの連用形デ、およびニテを上接するものが近世中期以降の台本に見られ、合わせて37例と多用されているが、疑問表現と共起する例に限られる。様々な助詞や活用語にも接続していた室町期に比べ、上接語の種類は少ない。また、共起する句末の表現形式は疑問表現と禁止表現に偏るといわれていたが、狂言台本では疑問表現に大きく偏り、禁止表現と共起するものは少数にとどまることがわかる。

では、以下の各項で、各文型ごとに実際の用例を確認し、バスの用法を考察する。

### 2.2 名詞上接・目的格相当

#### 2.2.1 疑問

名詞を直接上接し目的格に立つバスで、疑問表現と共起する例は、全用例171例中54例と最も多く用いられる文型である。収録曲数そのものが少ない『忠政本』を除くすべての台本で例が見られる。狂言台本中でのバスの最も基本的な用法といえる。

1. 大寒、小寒ばし食うたか (天理本・文蔵)
2. 防ヘキ様ナクシテ皆々舟ニ取乗り給フ所バシ食テ有ルカ (保教本・文蔵)
3. 俗嘔んで女郎と為すとある時は、栗の飯ばしきこしめしたか。 (三百番・岡太夫)

「文蔵」「岡太夫」「青海苔」などの同工の曲で、聞き手が食べた物の名が分からなくなってしまい、話し手があなた例を挙げるながり思い出させようとする場面で用いられている。具体例として挙げる一例を例立たせて「強調」しているとも、いくつか具体例を挙げるなかで例えばこのようなものかと「例示」して問いただしているとも考えられる。流派や時代を問わず、これらの曲が採録されているすべての台本で計46例と多用されており、狂言台本の中で古くから固定していた用例といえる。用例1、2、3で示されたとおり、述語動詞には単体、常体、敬体のいずれも用いられており、バスの表す「品位」とは関わりのない用法と考えられる。

4. 某カ殖入スル事ガ西ノ宮辺近隣レナフテ美物カ数多入フ思フテ生魚バスシ売ニ来テ有ルカヤアイ (保教本・夷毘沙門)

大蔵流『虎明本』『虎寛本』にも同様の例が現れる。姫養子の候補争いの相手となる聞き手が来た意図を、自分の嫁入りを祝うためと決めつける発話中のものである。聞き手である恵比寿が来た用件を、嫁入りではなくてゆかりの品である魚を売りに来たと決めつけるために「生魚」を「強調」していると考えられる。

5. もしも、経ばし御存かと申事で御ざる (虎明本・腹不立)

鶴流『保教本』にも同様の例が現れる。話し手が所の者、聞き手が通りがかりの僧侶である。この台詞の直前に、もう一人の所の者が「さだめつもし経も御存でござらふ」
と僧侶に聞く、僧侶が不愉快に思い「もし経」という経は知らないと答える場面がある。その僧侶への取りなしと説明のために言われた台詞である。「もし経」ではなく「経」を知っているかということを強調するために、このバシが用いられたと考えられる。なお、後世の台本になる「虎対本」ではバシは用いられず、『名女川本』『賢通本』では格助詞ヲを上接した形で用いられる。

### 2.2.2 禁止

この形式では、用例6のほかには一つの台本のみに現れる例に限られる。

6. なごりかはなる秋の夜の、虫のねもいとしけし、ゆめぼしさまし給ふな

（虎明本・わかに・箋）

話中の用例で、同曲「若菜」を採録されている『天理本』『賢通本』『三百番集本』にも現れ、現存最古の狂言台本である『天正狂言本』にも全く同じ形で現出することができる。狂言台本から得られる用例で最も古い形をとどめている、極めて伝承性の高い用例といえる。禁止という強く相手に働きかける形式では、バシによって何を禁止するかを際立たせる、つまり禁止する内容を「強調」する働きとして解釈しやすい。

### 2.2.3 仮定・意志・推量

仮定表現は大蔵流の台本のみに現れ、同一の書の同一箇所で用いられている。

7. さだめて生魚がたんとあらふ、それをくはせて、虫ばしきこさせてはと思うふて、山椒のかはをうりにきてあるか

（虎明本・えびす毘沙門）

婿養子の候補争いの相手となる聞き手の考えを推量する形で、自分の婿入りのお祝いの席で「食あたりになっては」と薬である山椒の皮を商売するためと、相手が来た意図を決めつける発話をものである。相手の考えという不確実なもの推量しているとはいえ、自分に都合のいい理由をつけるために勝手に判断した発話で、全体では疑問文になっている。この台詞に対応する聞き手側の台詞は、用例4で挙げた「うをばしりに来てらしか」となっており、台詞の対応を考えれば、「山椒のかはびしりにきてあるか」となるべきところであろう。後代の「虎対本」では、

8. 生魚を多く喰せ、虫ばし発せてはとおもひ、山椒の皮ばし売に来て有るか。

（虎対本・えびすびしゃもん）

と、「虫」と「山椒の皮」の両方にバシが下接する。同曲のこの台詞は驚流『保教本』にもあるが、

9. 聊忘虫ヲ発サセテハト思フテ山椒ノ皮ハシ売ニ来タカヤアイ

（保教本・夷毘沙門）

と「虫」ではなく、「山椒の皮」だけにバシが用いられている。

意志表現は『狂言記正編』に1例のみ見られる。

10. してそなたは。それかしに。あとさきについてまふは。法問ばし。してもみやう

と。おもやるか

（狂言記・宗論）
しつこく付きまとう聞き手に、その意図を問いかける発話中の用例である。パシが含まれる句としては意志だが、聞き手の考えを推量して問いかける文で用いられている。パシのはたらきとしては、「法間」にかかって「強調」あるいは「示示」として相手の考えを推量しているとも、「仮問をとてもみよう」という相手の考え全体にかかって、「強調」して自分の推測の確かさを示しているとも、または「例示」として推測の不確かさを示しているとも考えられる。

推量表現は最も新しい『三百番集本』に見られるだけである。

11. はあそちは道で喧嘩ばししたさうな。（三百番・悪太郎）

訪れるなり長刀を見せびらかし振り回す聞き手の様子を見て、気が昂ぶっている理由を推量した台詞である。特に「喧嘩」をした様子を示すような台詞や仕方はなく、「強調」の意は見出せない。興奮している理由の一例として「例示」したか、推測の不確かさを示すものと考えられる。

2.3 名詞上接・主格相当

名詞上接・主格相当のパシは近世前期の古い台本には全く見られず、近世中期以降の台本から現れる。狂言台本中での新しい用例といえる。各句末表現ごとに見る。

2.3.1 疑問

特に『虎寛本』に集中しているが、用例の多くは、挨拶や返事など固定的な台詞に限られる。ほかすべて述べる動詞が「ござる／おりやる」などの存在動詞であり、その動作主体性は低い。

12. 左様には存て御座れども、若御客ばし御座らうかと存て、夫故案内を乞ひまして御ざる。（虎寛本・せんじもの等）

13. 私は都へ登る者で御ざるが、何ぞ御用ばし御座るか。（虎寛本・三人夫）

14. 夫には又子細ばし御座るか。（虎寛本・おこさこ等）

用例12は、話し手が聞き手の家を訪れて挨拶する時の台詞で、話し手の心内文を引用する形で用いられている。全く同じ用例が『虎寛本』に23例も現れ、『三百番集本』にも同じ用例が1例見られる。

用例13は、道で声を掛けられたことに対する返事の中で用いられる。『虎寛本』独自の用例だが、5例現れる。なお、同じ台詞でデを上接した形では、『賢通本』で7例、『三百番集本』に4例現れる。

用例14は『保教本』で1例、『名女川本』で2例、『虎寛本』で6例現れる。相手に事の細かい事情を尋ねる場面で用いられる。この例には、副助詞デモと入れ替わり、常体で表現された例、「夫には又子細でも有るか。」（虎寛本・すはじかみ等）があり、新たな用いられるようになるパシの意味を考える上で貴重な例といえる。

これらのパシは、上接語である「御客」「御用」「子細」に、具体的な同類項があると
する単純な「例示」として考えにくい。話し手の疑義そのものをほかしてやわらかく、また改まった形で伝える表現と考えられる。極めて定型的・固定的な台詞だが、古い台本では全く現れない。

15. 上京と下京に、姉と妹を持って御ざるが、是に女ごの子が一人宛御座る。是ばし姪の内で御座らうかと仰られて被下い。（虎覚本・あはた口）

16. こればし芸で御座らうか。弓鞠包丁築双六。馬の伏せ起し。やつと参ったを致す。（三百番・鼻取相撲）

例15と同じ例が『三百番集本』で現れる。3例とも「こればし～でござらうか」という同様の文型で現れる。この指示詞を上接する例は近世前期の台本には全く見られない。指示詞「これ」が指し示す対象そのものには変化はないが、指示詞の直接的な表現にバシを下接し、「これ」が指し示す対象に同類項が存在するように仮想的に示すことにより、やわらかく丁寧に表現したものと考えられる。

2.3.2 推量・仮定

推量表現は2例とも「虎覚本」に現れる。

17. 今一度こなたに御目に懸りたい～と申て御ざるが、幸所は鳥尾野成り、若ふあくが幽霊ぱし出ました物で御ざらう。（虎覚本・ふあく）

18. こなたの御下り被成たを籍しもうおもふて、もし平六どの、幽霊ぱし出ました物で御ざらうと存ます。（虎覚本・ぬし）

これらは死んでいるはずの人間が現れてしまい、聞き手に見た人影が幽霊だと納得させなければならない場面で、推量句内とはいえ「強調」の意として解釈することができると、推量の不確かさを示す用法と考えることもできる。なお、より後世の和泉流『三百番集本』の同一場面では、

19. 拝はお前をなしかう思うて。平六の幽霊がな出たもので御座らう。（三百番・塗師平六）

と、推量表現と相性の良い助詞ガナが用いられ、「例示」の意味合いで考えることができ、仮定表現は最も新しい『三百番集本』ののみに見られる。用例を示すにとどめる。

20. 其様に云はずとも稽古の事ちや。悪い所ばしあらす。遠慮なう云うておりやれ。（三百番・八句連歌）

2.4 ラ・疑問

目的格相当のバシが計66例あるのに対し、格助詞ヲを上接するものはわずかに11例で、すべて疑問文中に用いられていた。今回の調査範囲の中でバシの使用が最も多かった「虎覚本」では全く用例が見られない。狂言台本でバシが目的格に立つ場合、名詞を直接上接する用法が中心であるといえる。
21. 火花を散らし、合戦したる所をばし食うであるか　（天理本・文蔵）
用例21の様な「文蔵」やその類曲の例が計9例現れるが、和泉流の諸台本と大蔵流『虎明本』では、「語り」から「～所」と通常の台詞に戻って食べたものを問いただす箇所、および、「野老（ところ、山芋の一種）」を食べたくと聞く箇所で用いられ、その他の場合は用例1、2、3のように名詞を直接上接する。「トコロヲハシ」と発音する箇所に限られているわけである。なお、驚流の台本と狂言記類の同様の例では格助詞ヲは上接せず、すべて名詞を直接上接している。
22. 若、経をばし御存知かとの問び事で御座る、　（名女川本・腹不立）
用例22は用例5と同一場面の「腹不立」の例で、『名女川本』『賢通本』で1例ずつ見られる。用例5と同様に「強調」の意を示す用例といえる。

2.5 ト・禁止
助詞トを上接する例は、6例すべて禁止句中に現れる。これは中世の抄物から得られる用例にない特徴である。以下に用例を示す。
23. けふよりはうちへこふとばしでおもはすなり、　（虎明本・花子）
24. 背に腹はかへらず、今汝を打程に、必草葉の影でも某を恨とばし思ふてくらな。　（虎寛本・うつばさる）
25. 母は最早親里へ行くぞ。構へてわたらを恨みとばし思ふなよ。（賢通本・法師が母）
用例23は、『虎明本』にのみ見られる。用例24は、芸を仕込んだ猿に宣命を含めて殺そうとする場面の台詞で、『保教本』『賢通本』『三番集本』に共通して現れる。用例25は、幼い子供をおいて実家に帰る際の台詞である。用例24、25は「恨みとばし思うな」と共通した芝居がかった言い回しであるが、この言い方は近世前期の台本では用いられない。

2.6 に・禁止
『和泉家古本』に1例のみ現れる。
26. 是はされ事、かまへて心にはしおかきやるな　（和泉家古本・昆布売）
大名が聞き手に言うことを聞かせようと刀を抜く振りをしておどし、言うことを聞くと約束させた後に、斬るというのは冗談であるという台詞である。

2.7 デ・疑問、ニテ・疑問
デ・ニテを上接するパスは、近世前期の台本ではまったく用いられないのに対し、近世中期以降の台本では計37例と多用される。名詞上接・主格相当の用法と並び、近世中期以降のパスの中心的な用法といえる。全用例〜デパス+ゴザルカ／オリャルカと云う、疑問句末で敬体の指定辞に挟み込まれた形で共通しており、用例数は多いが、用い
られる状況は定型的な台詞に限られる。特に騒流の台本で用例が多く、『忠政本』唯一の用例がこの形である。また、より古体であると思われるニテは最も新しい台本で神仏に素性を聞き、招き入れる場面にのみ用いられている。以下に用例を示す。

27. 鞍馬辺より仰らし、ハもし此沙門天王てぼし御ざるか
（忠政本・あひすひや門）

28. 拝NH芝ノ推量致ヌニ若西ノ宮ノ夷三郎殿デバス御座リマスルカ
（保教本・夷毘沙門）

29. さては毘沙門天にてばしござるか。
（賢通本・連歌毘沙門）

これらのように、近世中期の台本でデを用いているのに、後期の台本でより古体のニテに変更されている。古体と共起させることにより、改まりや丁寧さをより強く表したものと考えられる。また、同場面は各流派の近世中期以前の台本で必ずバシが用いられている。近世前期の台本では「毘沙門天王にて御座るか」「えびす三郎殿か」（いずれも『天理本』『恵比寿毘沙門』）などの表現で、バシやそれに置き換えられるものは現れない。

このほかに、定型的に用いられる用例を以下に示す。

30. 賢実は都へ上る者でござるが、何ぞ用でばしござるか。
（賢通本・今参）

用例30のような台詞は、道の途中で声を掛けられたことに対する返事をとして定型的に用いられている。『賢通本』で7例、『三百番集本』で4例、また大蔵「虎寛本」では、用例13のようにデを介さない形で5例用いられる。これも近世前期の台本では「御用でござるか」（『虎明本』『鼻取相撲』）のようにバシは用いられない。

特に注意される用例が、用例31、32の「入間川」で用いられる例である。

31. 向イナ者二物間ト仰ラール、ハコテノ事デハシ御座ルカ
（保教本・入間川）

32. 何事でばし御座るぞ。
（虎寛本・入間川）

土地の名を所の者に聞いた大名が、初めは無礼な返事をされて怒るが、丁寧に問い直したところ言葉遣いを直した丁寧な返事をうけて喜ぶ場面である。いずれも丁寧な返事として「でばしござる」を用いており、それをきいた大名も「言葉を直した」と喜んでいる。近世前期の台本でも言葉遣いを直す筋立ては見られるが、丁寧な返事は「何でござるぞ」（『虎明本』）のようにバシは用いられない。ここから近世中期以降の台本におけるバシの丁寧さを読みとることが出来る。

また、『名女川本』固有の用例として、

33. いってみわふるずは、夫に御座るは、今夜の御夢想の御妻でばし御座るかと云てこひ
（名女川本・伊文字）

と、夢のお告げで妻となるといわれた人に話しかける台詞が5例現れる。

これらのバシは、疑念の焦点となる語を明示しているという可能性は否定しきれないまでも、「何事」など不定語を上接し強い疑問を表すことや、相手の素性を強調して問
いかることが語用論上非礼に当たることなどから、の上接語を「強調」していると捉えることは難しい。また、の上接語の同類項を単純に暗示する「例示」の意味で解釈するとしても、具体的的な同類項を想定することが非常に困難である。これら新しいパシを含むデバシゴザルカ／オリャルカという形は、文脈上、改まった場面で丁寧な言葉遣いが要求される発話中に現れること、パシをはさむ指定辞は敬体に限られ、デバシアルカという形は皆無であることから、固定的な丁寧な疑問表現ということが出来る。パシを用いることによって、実際には想定できないにも関わらず、仮想的に上接語に同類項を示して上接語を直接指示する力を弱めたり、発話者の疑義そのものをはかしたりした表現となり、結果として婉曲的な「品位」の高い表現として理解されたと考えられる。

なお、中世後期については、筆者が既に行なっている抄物での調査では、
34. 是モ異説テバシアル敷 (史記抄・十六)
35. 経ノ時テバシアルカ (玉塵抄・二十五)
など、敬語表現と共起しない、テアルカに挟まれた形のパシが多数現れている。また、キリシタン口語資料や『捷解新語』には、
36. 元より走らせらるに早ことも世に並びがないと見及でござれども、何とした子細でばしござるぞ、あの犬にばかりここことばで追われさせられるのは、何が一つとして犬に劣らせらる事はあるぞ？ (天草版イノポ物語・鹿と子の事)
37. さてて然でばし御座るか。然程に思いやる程ならば何しに苦労に懸しめるせうか。(捷解新語・六)
という丁寧な疑問表現に挟み込まれたパシがすでに現れる。この用例の存在はロドリゲス『日本大文典』の記述とも時期的に合致する。
これらの表現が中世後期の口語資料に現れているにもかかわらず、近世初期の狂言台本ではまったく用いられない。近世初期、疑問の指定辞に挟み込まれたパシが口頭語として一般にも用いられ、近世中期以降に狂言台本に取り入れられたのか、狂言台本以外の中世末期から近世期のパシの様相について今後さらに調査が必要となろう。

3. 考察

以上見てきたように、狂言台本におけるパシの用例の大多数が疑問表現と共起するものであった。そのうち、名詞を上接し目的格に相当するパシが、近世前期からの諸流派各台本で共通して用いられる一方、近世中期以降の新しい台本で、名詞を上接し主格に相当するパシや、丁寧な疑問の指定辞に挟み込まれたパシが、固定的・定型的な表現の中ではあるが多用されるようになる。禁止表現と共起するパシは、古体を残す謎の用例や特に芝居があった場面で用いられるほかは用法の広がりを見せない。また、近世後期の台本で数は少ないものの新たに推量表現や仮定表現に用いられるパシが現れる。
近世前期の狂言台本以外での資料では、パシはどのように用いられていたのだろうか。比較のために近世前期の報告と、近松の浄瑠璃台本による調査を行った。その結果、主に

38. 仏もはしく何ここにあり、ちこくは髪あり、よし草ともに示用ならば、何時にてものある事も、かもへて～よそをはべうらやましきりくらと、のべ絵へば、

（一休諸国物語・第十・或人一休に天道のいればを問事）

のような、禁止表現の例が4例（うち2例が和歌の例）、

39. 国の守きからしきてあげさせられ、若者訏部し有かと御尋有けれは、…

（宇喜徳主古今伽観・三・誇誇師柳上公事の事 [主格相当]）

40. 何様我々をたづねんため、火事のところにうかに入して、けふにむせせしにたまふか。さなくハ、けがばし給ふか。うぐすて・ハをかれまいとて、…

（鹿の巻筆・にせ屋しま [目的格相当]）

のような、疑問表現の例が8例得られた。疑問の例のうち4例が名詞を直接上接し主格に立つパシだったが、指定辞に挟み込まれる例は見られなかった。

近松の浄瑠璃台本では、

41. 五十年六十年の女夫の中も。ま、にならぬは女の習。必ずわしを恵んでばし下さるなといふ内に。篭に映る羽の光お吉色びっく里。（女殺油地獄）

のような、禁止表現の例が9例、

42. 市中をはなるせ座隠の遊び面白し去りながら。琴詩酒の三ツの友をはなれ。暮を打って勝負を詰ひ給ふ事別にたのむし所ばし候か。 （国姓爺合戦 [主格相当]）

43. 御尋ね有りたきとは何事にてばし御座候。（傾城反魂香）

44. う、忠三殿におかさまはなかったが。此方はどれでばしござるぞ。（冥途の飛脚）

疑問表現の例が6例と、禁止表現が多く現れた。疑問表現では、用例42のような名詞を直接上接し主格に立つパシが3例、用例43、44にあげた丁寧な疑問の指定辞に挟み込まれるパシが2例見られた。用例数は少ないものの、近世中期以降の狂言台本で新たに用いられる例と共通する傾向が確認できる。これらは狂言台本同様舞台上の言語であり、より詳細に検討する必要があるが、これら近世のパシが近世中期以降の新しい狂言台本に取り込まれていったと考えることができよう。

狂言台本におけるパシの用法の変化の要因としては、近世前期の古い台本から近世中期以降の新しい台本まで共通して用いられる用例1、2など、現在「強調」とも「例示」とも解釈できる用例の存在が挙げられる。本来「まさにこれである」と指し示す「強調」の助詞として用例1、2などで多用されたパシが、事物を列挙して取り上げる文脈でパシが用いられるために、本来の「強調」としての意味がわかりにくくなり、「例えばこのようなもの」と一例として挙げて示す「例示」の助詞として解釈されるようになり、「中世語」として「狂言らしさ」を演出する効果とあいまって、近世中期以降狂言台本
中で新たな用法で用いられるようになったのではないか。

つまり、本来パシの働きは、上接語を際立たせて示す「強調」というものだったが、新たに用いられるようになるパシは、逆に「強調」が示す「際立たせる」という意味から「際立たせる前の母集団」を想起させるようになり、際立たせて示すという意味が薄れ、単純に上接語と同類の集合の存在を想定させる「例示」の働きに転じたものと考えられる。このようにパシが「例示」の意で解釈されるようになったために、その同類を暗示する働きから、実際には存在しない、あるいは想定できないはずの同類の集合まで仮想的に暗示し指定する対象をもかしたり、話し手の疑義そのものをはかしたりして表現を和らげる、「品位」を表す用法として新たに用いられるようになったのではないか。近世中期以降の台本で新たに用いられるようになる主格相当やデ・ニテを上接する例がこの用法のパシであると考える。

このパシゴザルカ／オリャルカなどの形は、安田（1980）における、コソゴサレと非常に近接した形といえる。安田（1980）は、コソ～已然形が中世末期には古語ゆえの品位を持った表現として、丁寧な言葉遣いが求められる挨拶表現などで「つうこそ御座り」などと用いられることを指摘している。さらに拙稿（2005）ではパシと同じく例示の用法を持つようになる副助詞ガナが近世中期以降の狂言台本でデガナゴザラウ／オリャラウなど、丁寧な推量表現に割って入る形で用いられることを指摘した。ガナについては、礒本や近松の浄瑠璃台本など狂言台本以外の近世の文獻でも同様の用例が多数見られるが、パシの場合同様の用例はごくわずかである。その古語としての品位と、「例示」用法から派生した婉曲的用法から生まれる「丁寧さ」と、パシが持つ疑問表現との共起性の高さから、丁寧な疑問表現として用いられるようになったと考えられる。

4. まとめ

本稿では、狂言台本におけるパシの使用実態の調査を行い、以下の点を明らかにした。
• 上接語は、名詞を直接上接するものが大半を占める。そのうち、パシが目的格に相当するものは全期を通じて用いられる。パシが主格に相当するものは近世中期以降の台本で新たに用いられるようになる。デ・ニテを上接するものも近世中期以降の台本で多用される。その他の上接語は種類も用例数もごく限られる。
• 共起する句末形式は、疑問表現が大勢を占める。禁止表現は謎など定型的な用例に限られ、その他の表現はごく少数であった。
• 近世中期以降の台本で新たに用いられるようになる、名詞上接・主格相当やデ・ニテを上接する用例は、ほぼすべて「ゴザルカ／オリャルカ」という丁寧な疑問表現と共起する。
これらの事実から考察を行い、以下の結論を得た。
• 本来「まさにそれである」と上接語を際立たせる「強調」の働きを持っていたパシは、
その代表的な具体例の性質や「強調」そのものが持つ性質により、「例えばこのようなもの」と上接語の同類の集合を想定させる「例示」の働きとして解釈されるようになった。さらに、「例示」として解釈されたパシは、新たに上接語の同類の集合を仮想的に表したり、話し手の疑義そのものをはかって表現したりする、「品位」を持って疑問を表す用法が、近世中期以降の台本で見られるようになる。

今後の課題として、狂言台本内での疑問表現や禁止表現全体の中で、パシをもっている形式がどのような表現性を持つのかという考察や、中世後期や近世前期、また中期以降の狂言台本以外の資料での様相とおり詳細な比較が必要と考えられる。特に近世期については助詞の発達と比較しながらの考察が必要だろう。

注1 現存最古の狂言台本である『天正狂言本』では、用例6と同じ『わかなか』の語の例と、「つりきつね」の「かまいてきつねはしきろしさす」いう例の計2例、禁止と共に異なるものが確認できた。「つりきつね」は狂言師の登竜門でえる大曲であり、高い伝承性があると考えられるが、この用例は以降のどの流派にも伝承されない。また『祝本狂言集』『虎清本』『狂言記外五十番』『狂言記拾遺』ではパシの用例は皆無だった。

注2 『和泉家古本』では、
・それかし此所へ舞入するか西の宮迄かくれかなるふて定面生魚かあまだらうと思ふて肴かな売にきた物であらう
（古本・恵比須毘沙門）
と同箇所に副助詞ガナを用い、推量の形で現れる。ガナとパシとの関連性を見る上で貴重な例である。なお、同じ和泉流でも天理本・三百番集本の同箇所は「なまうをうりにきたか」とヲを用いる。

注3 用例を示すにとどめる。
・もし山のかみがきて。なにかをいふとも。かぶりばかりふて。物ばしふな。
（狂言記正編・花子）
・かならすへ～物ばしふな。
（狂言記正編・花子）
・中々沙汰ハシサシマヌマ
（保教本・毘沙門速歌）

注4 今回は調査対象外としたが、大蔵流八右衛門派『虎光本』（文政六年書写）でも『虎観本』同様「虫」と「山椒の皮」両方にパシを用いている。また、『和泉家古本』では、
・それかし此所へ舞入かくれかなるまちとこの奥までかくれかなるふて定面生魚かあまだらう
（古本・恵比須毘沙門）
す虫をおこさせはなるまちと思ふて山椒の皮かな商売にきたか（古本・恵比須毘沙門）
と「山椒の皮」だけに副助詞ガナを用い、疑問の形で現れる。同じ和泉流でも天理本・三百番集本の同箇所は「山椒のかわをうりにきたか」と格助詞ヲを用いる。

注5 その他のものは以下の1例であるが、これも動作主体性はない。『三百番集本』にのみ見られる。
・このやうに云つて居たば。行き通りの者が。あの坊主は気ばし違ったかたど。雲うで御座うら。
（名取川）

注6 もちろん、デバシゴザルカ／オリルカが用いられた狂言台本で、パシを含まないデゴザルカなど、他の丁寧な疑問表現がどの程度の数、どのような相手にどのような場面で用いられるかの検証も必要であるが、稿を改める。
注7 暇本の調査には『暇本大系』（東京堂出版）、近松浮橋磨台本の調査には『日本古典文学大系』『近松浮橋磨集上・下』を用い、国文学研究資料館日本古典文学本文データベースも調査に利用した。なお、近世上方語の資料として西鶴の浮世草子も調査対象としたが、パシの用例は見らなかった。パシの舞台言語的な性格が関わるかもしれないが、より広く近世語を調査する必要がある。

資料

参考文献
此島正年（1966）『国語助詞の研究——助詞史の構造——』桜栂社
小林賢次（2000）『狂言台本を主資料とする中世語法語法の研究』勉誠出版
小林千草（1994）『中世のことばと資料』武蔵野書院
小林正行（2005）『狂言台本における助詞ガナ』『日本語研究』25 号 東京都立大学国語学研究室
小林芳規（1988）『鎌倉時代語研究の課題』『鎌倉時代語研究』第十輯 武蔵野書院
坂詰治（1993）『室町時代における助詞『パシ』について』『小松英雄博士退官記念日本語論集』三省堂→『国語史の中世論文』笠間書院（1999）に再録
蜂谷清人（1998）『狂言の国語史的研究；流動の諸相』明治書院
堀内武雄（1967）『特殊な助詞の研究——ばし・かに・づつ・かが』国文学解釈と教材の研究 12 巻 2 号
矢尾達之（2002）『近世前期における助詞パシの用法』『文献探究』40 号 文献探究の会
安田章（1997）『助詞 2』『岩波講座日本語 7』岩波書店→『国語史の中世』三省堂（1996）に再録
（1980）『コソの拘束力』国語国文 49 巻 1 号
（1985）『係結の終焉』『鶴岡論壇』1 号→以上『外国資料と中世国語』三省堂（1990）に収録
山口壱二（1988）『助詞『など』とその周辺』語文 50 号 大阪大学国語国文学会
→『日本語疑問表現通史』明治書院（1990）に再録
狂言台本における助詞バシ

(1998)「係り結び体制末期の新旧連立形式―機能の新旧連立性―」『京都語文』3号
→『構文史論考』和泉書院 (2000) に再録

山田孝雄 (1914)『平家物語の语法』国定教科書共同販売所→寶文館で再刊

湯澤幸吉郎 (1936)『徳川時代言語の研究』刀江書院→風間書房で再刊

（1929）『室町時代の言語研究』大岡書店→『室町時代言語の研究』風間書房で再刊

付記 本稿は国語学会2003年度秋季大会での口頭発表を基にしたものである。席上、多くの方々からご指導を賜った。また、編集委員会からも貴重なご意見を頂いた。記して感謝申し上げます。

——東京都立大学大学院生——
（2006年2月3日 第1稿受理）
（2006年6月30日 最終稿受理）
The Emphatic Particle *Bashi* in *Kyōgen Daihon*

KOBEYASHI Masayuki

Keywords: *bashi*, *Kyōgen Daihon*, emphatic particle, illustrative particle

This study examines the actual conditions of the emphatic or illustrative particle "bashi" in *Kyōgen Daihon*. *Bashi* was used as a colloquial expression during the Kamakura and Muromachi periods. This research deals with the change in the use of *bashi* during the Edo period.

The following facts were clarified.

1) Nouns account for more than half of the preceding words. Among these nouns, the objective case is observed to have been used throughout the Edo period, whereas a nominative case is also used and the mid Edo period. From this period, the auxiliary verb *de-nite* is also used.

2) The majority of the co-occurring phrase-final expressions are interrogatives. Prohibition expressions are limited to definitive forms like *utai*, and the newer *bashi* co-occurs with the polite interrogatives *gozaruka* and *oryaruka*.

Based on the aforementioned facts, we can draw the following conclusions regarding changes in the use of the particle *bashi*. The expression *bashi* originally functioned to emphasize preceding words, but was reanalyzed as functioning to show members of a set similar to the preceding noun, in the sense of "for example, these kinds of things". Furthermore, scripts from the mid Edo period show that it came to be seen as indicating other imaginary members of a set containing the preceding word, and hence functioned as an "elegant" interrogative.